
2人のセカイ

黒羽鷺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2人のセカイ

【Nコード】

N7735H

【作者名】

黒羽鷺

【あらすじ】

朱色の世界に切り取られた放課後の教室。女の子の目線と男の子の目線で2人の勘違いを紐解きます。

第1話 朱色のセカイ

ふと顔を上げると

夕日が教室を赤く染め始めていた。

教室に居るのは私と彼。

教室に響くのは私の簾の掃く音。

私の世界はこれだけだ。

自然と溜め息がもれる。これで何回目だろ。

考えも止まらない。答えも、まだでない。

今日の日直は私と彼の2人。

日直は毎回ペアが変わるので

次の機会には別の人と組むことになるだろう。

彼との付き合いは決して浅くはない、と思う。

出会いなんてもう覚えてない。

何度も喧嘩して

何度も心の中で謝って。

腐れ縁ってのが正しいのかな。

性格はよく分かってる。

優等生面してるけど、ほんとは口ばかり回る嫌なやつだ。
むかつくことに口で勝てた試しがない。

私は口より先に手が出ちゃうタイプ。

実際に我慢できず手を出したこともある。

余裕の表情で受け止めるか、失敗してそのまま殴られる。

前者はそれがまたむかつく。ので足が出る。

後者は物足りないけどあまりのカッコ悪さに力が抜ける。
何度殴られても懲りない。

きつとMなんだと睨んでいる。

今日の日直も何かあれば怒れる分、気楽なぐらいだった。

しかし昼休み、

いつものグループと昼食を食べている時のこと。

友人が授業中、私をちらちら見ている彼を目撃したというのだ。
彼の席と私の席は横が同じ列だ。自然に目に入る位置ではない。

好きなんじゃないのか？彼、意外とかっこいいよね。

偶然じゃないの？本当に私を見ていたの？

彼の人気は悪くないよ？告白されたらどうするの？

話はどんどんヒートアップし、散々からかわれ
その熱を保ったまますぐに別の話に逸れていった。

・・・そもそも、私は可愛い男の子が好きなのだ。
私にしてみればからかわれるネタを探されてたんじゃ・・・
なんて自分の行動を思い出しハラハラするだけで
皆と一緒に黄色い声をあげる余裕はなかった。

午後の授業。

視線を感じる。

誰だ・・・なんて確かめなくても分かる。

きつと友人達が興味本位で眺めているのだろう。

監視されるなんて良い気がしない。

全部彼のせいだ。

何かしら理由をつけてぶん殴ってやる・・・

だが、授業が終わる頃には飽きちゃったのかぐーすか眠ってる。
実は私も凄く眠い。

お昼ご飯の後の歴史の授業なんて、普段なら睡眠時間である。
私だって変に緊張しなければとづくに寝ていたね。
その緊張は解けてしまった。

瞼が重い。自然に閉じていく。

でも、あと数分我慢すれば授業も終わるじゃない。
まずは黒板をちゃっちゃと写してしまおう。

友人達のノートはきつと真っ白だろう。

写させてくれ、なんて頼まれるかもしれない。
どれくらい焦らしてやろうか・・・

友人への優越感に浸る自分を想像していると

・・・世界が揺れた。

一瞬で現実に戻る。舟を漕いでいたらしい。

急いで横目で彼の方を確かめる。

自然に目を逸らされた気がする。

・・・油断した、見られた。

後でなんと言って笑われるか、考えるだけでも気が重い。

もういいや、寝よう、寝てしまおう。

頑張ろうなんて思わなければ・・・

ひどく後悔しながら私は意識を放り投げた。

「おい、そろそろ起きとけよ」

彼の声がする。目が覚める。夢じゃない。現実だ。嫌な予感がある。顔を上げると授業は終わり、皆帰ろうとしている。またもやってしまった。自分の失態に気付き一気に覚醒。

「・・・なによ」

「起こしてやったのにそれかよ」

何も言い返せない。恥ずかしさで顔が燃えてしまいそう。逃げ帰ってしまいたいがそうもいかない。

私たちは日直なのだ。その仕事の分担の話をしにきたのだろう。

「仕事の分担の話でしょ、さっさと決めて、さっさと終わらせる！」

しかし、彼は私の顔をじっと見つめている。なんだか恥ずかしくなってくる。

「・・・なんかついてる？」

「頬に寝てた跡がな」

顔が沸騰しそうになる。突き飛ばしたくなる衝動を抑える。

「しかし、今日は珍しく授業中寝ないと思ってたら最後の最後に寝たな、期待を裏切らないやつだ。」

誰の期待よ！なんて言いかえそうとして、気付く。

確かに今日は最後以外寝てない。でも、それを知ってるってことは・

「まあいいや。ちゃっちゃんと決めちまおう。」

俺が日誌と・・・」

友人達の言葉を思い出してしまふ。

そういえば、さっき見られた事も笑われてない。

ただ、見られてただけなんだろうか。

「・・・をやるから、残りがそっちで大丈夫か？」

いや・・・まさか、ね。でも・・・もし・・・どうしょ・・・
顔が少しずつ赤くなっていくのが自分でも分かってしまふ。

「聞いてるか？」

「ん・・・大丈夫」

「ならさっさと終わらせるぞ。」

彼の事をどう思っているのだろう・・・嫌い、ではない。

じゃあ、もし・・・告白されたら・・・？

自分の割り振られた教室の掃除を始める。

考えて仕事の手が付かない。溜め息が出てしまふ。

掃除はまだまだ終わりそうにない。

彼は仕事をてきぱきと終わらし、机に座り日誌を書いていた。

多分、あれが最後の仕事だろう。

夕日に照らされた横顔は悔しいが様になっていた。

慌てて目を逸らすと、また1つ、溜め息をもらす。

第1話 朱色のセカイ（後書き）

「2人のセカイ」Girls Side その1です。
名前をつけるってのがこんなに難しいとは・・・

登場人物からタイトルまで一番悩んだんじゃなからうか。
悩んだ結果、登場人物は名無しです。

読める内容でしたら、お好みの名前を当てはめて下さい・・・

そんな楽しみ方もできる小説、作れたらなあ・・・

第2話 朱色のセカイ その2

・・・何を考えているのだ！

少しばかりカツコいいからって本性はあれだし！

どうせ掃除だって手伝ってはくれないだろうし！

私は可愛い男の人が好みだと確認したじゃない！

今日は意識してしまうが、それは変な話を聞かされたからだ。

さつさと終わらせてさつさと帰って忘れてしまおう。

もしバレてしまったら永遠に笑い話にされてしまう。

考えるだけでもおぞましい。

最後に1つ溜め息をつき、気持ちを入れ替える。

うん、もう大丈夫だ。

いつのまにかヤツは日誌も書き終わって外を眺めてる。

・・・少しイライラしてきた。

そもそも、掃除は2人でやるもんでしょうが。

女の子にまかせて1人ぼーっとしてるなんて酷い野郎じゃない。

「あのさあ。あんたもやってよ掃除。」

なんて不満そうな顔。

誰のせいで私がこんなに苦しんでると思っているんだ。

「今思えば、分担内容が不公平でしょ。」

反応はない。ただ、見つめられるだけ。

夕日が差し込み綺麗な朱色の瞳。そこに写る自分。

心拍数があがってるのがわかる。ときどきしてるんだ、今。

なんでこんなに意識してしまうんだろう。変なことを考えてしまう。

・・・くそう！負けじと睨み返す。

「・・・なんか言いなさいよ」

「赤いセロファンを通してみたいだなーと」

「は？」

「ほら、今日は夕日が綺麗じゃんか。世界が赤いなと思ってたら誰かさんも顔も真っ赤で、思わず見とれてたんだよ」

・・・っ！見とれてたって何！何で！誰に！

一瞬で顔の血が沸騰してしまったようだ。

思わず伏せてしまった顔を上げることが出来ない。

なんでこんな恥ずかしいことを平然と言えるのよ・・・！

まさか、本当に・・・想われている・・・とか。

耳元で心臓が響いてる。

そもそも、私はなんでこんなに過剰な反応してるんだろう。分かる気がするが、分かりたくない。

「なんで平気でそーゆー事言えんの？」

「普段から言い慣れてるからじゃないか、知ってるだろ」

知らないわよ！・・・言い慣れてるの？誰に！

だから私にも平気で言えるの？

何で私は怒ってるのだろう。何に対して怒ってるのだろう。

「・・・誰にでもそんなこと言ってるなんて外道だね。」

そんな台詞は大事な人だけに言ってあげるのが普通じゃないの？私はこの外道に笑いものにされてるだけなの？

ならいつもみたいに冗談だ、落ち着けよって言ってよ！

「彼女にだけ言ってあげなよ、そーゆーのは！」

「彼女が居れば是非」

「・・・居ないのは知ってるよ」

「知ってたら俺が驚くな」

「・・・だからって、あたしにそんな事言わないでよ！
変に勘違いしたらどうすんだバカ！」

相手が変に冷静なせいで逆に興奮してしまう。

いつもそうだ。自分で何を言っているか、もうわからない。

「何を？」

「何をって・・・何がよ」

「何を言われたら、どう勘違いすんだ？」

顔は熱くて、興奮して、怒ってるか恥ずかしいのか分からない。
なのに

質問に答えようと落ち着いてしまった。

どう勘違いって言うはずないじゃんか！そんなこと！

また俯いてしまう。恥ずかしさで死んでしまいたい。

「・・・うう・・・」

言葉にならない呻き声しか出てこない。

恥ずかしい！恥ずかしい！

なんであんな事言っちゃったんだろう・・・

もうためだ、おかしくなってしまう。

逃げよう、逃げてしまおう。

「・・・元はといえばあんたが！」

こそこそ私を盗み見してるから変な噂がたってる。

そう言おうとした言葉は続かなかった。

言葉と同時に指差そうと振り上げかけた手が机のカドに直撃した。

「いつ・・・たぁー」

何やってるんだろう私。カッコ悪い。痛いし。

もう泣いてしまいそうだ。

笑えば良いじゃない。ゲラゲラと。

そうすればすっきりするから。私もきつと笑えるから。

「おいおい大丈夫かよ。手、痣できてないか？」

なんでよ。なんでこんな時に優しくするのよ・・・。

私は笑って欲しいのよ！

今の、笑うタイミングじゃない。馬鹿にするタイミングじゃない。

・・・涙はもうこぼれかけてる。

なんで？我慢できそうにない。

恥ずかしいのに。痛いのに。

苦しいのに。悔しいのに。

凄く、嬉しかったんだ。

心が震えてしまった。

もうダメだ。

こいつ許さない。

泣くぐらいなら殺してしまおう。

ぶっころす！

私を心配して近づいてきた間抜けに全身でタックルをかます。

「ぐへっ！」

床に叩きつけ、馬乗りになる。

凄い音がしたが気にしない。

・・・なんか眼の焦点がずれてるが今の私にはそれどころじゃない。こいつをやつつける方が大事なのだ。

「あんたさあ・・・あんたさあっ！」

「あたしをおちよくりたいんなら変に優しくしないでよ！
バーカって笑えばいいじゃない！なんでよ？なんで？」

やつつけるハズだったのに力はいらず

出せるものは涙と質問の言葉だけ。

いつもみたいに殴れば良いだけなのに。
分かってしまった。

こいつの事、好きだ。今の私じゃ倒せそうにない。

「・・・ごめん」

なんでこんなことになっちゃったんだろう。

いつから好きだったんだろ。こんな可愛げのないやつ。

ああ、でも終わったよね。

私、凄く嫌なやつだ。

もう顔を見る勇氣もない。

力入らないけど、すぐ逃げないと。

これ以上嫌われたくない。

一人になりたい。帰ろう。帰って寝よう。

逃げてしまおう。潰れてしまおう。

「好きだから・・・かな」

その意味がわからなかった。

私に優しくしてくれた理由？

好き、だから？

私を？本当に？こんなことされても？

「…え…っあ…冗談…だよね？」

「ああ」

「死んでしまえっ！」

意味が分らない。

やっぱりころす！今ならやれる！

しかし、振り上げた拳は止められる。成功されたようだ。

「冗談だよ」

そう言って彼は少し照れたような、いつもの顔ではにかんだ。

バカ…本当に死んでしまえ…

手は握られたまま。離してくれない。

ダメだ。涙が止まらない。嬉しい、んだよね。

彼と目が合う。

今の自分はきつと、泣きながら笑う酷い顔。

慌てて顔を背けられた。

夕日はもう沈みかけていたけど、しっかりと見えた。

照れて顔真っ赤な彼の顔。

「…意外に可愛いじゃん」

この瞬間の2人のセカイがいつまでも続きますように、そう願った。

第2話 朱色のセカイ その2（後書き）

ここで彼女が見たセカイは終了です。

次回はB o y ' s S i d e

この朱色のセカイ。

彼にはどんな色に見えたのか。

もし宜しければ、続けてお付き合い下さいませ。

題3話 朱色セロファン

ふと顔を上げると

夕日が教室を朱く染め始めていた。

隅には夜を思わせる薄い影。

朱色と黒が市松模様みたいに教室を彩っていた。

数十分前までは賑やかだった教室も

今では、日直の彼女と俺以外誰もいない。

彼女は時折溜め息をつきながら、箒で床を掃いていた。

俺はそれを横目で眺めながら机に座っている。

理由なんてない。手持ち無沙汰だったのだろう。

自分の分担はとくに終わってしまったしな。きっとそうだ。

だからといって掃除を手伝ってやる、なんて選択肢はない。

掃除の当番はあいつだけとなっている。

仕事の分担をした時点で量の差に気付かなかったあいつが悪いだろ。

つか、何に言い訳してるんだろね。

自分で自分に意味の無い言い訳なんて本当に意味がな・・・

「あのさあ。あんたもやってよ掃除。」

ああもう。人が考え事してるっていうのに。

しかも口を開いたと思ったたらそれかよ。

正直に落胆を顔に出す。

「今思えば、分担内容が不公平でしょ。」

彼女の顔が少し不服そうに歪み、しかしその瞳は俺を睨みつけたまま動かない。

濃い茶色の瞳が、夕日で朱く染まっていた。

まるで赤いセロファンを通して世界を見ているようだ。

「・・・なんか言いなさいよ」

「赤いセロファンを通してみたいだなーと」

「は？」

「ほら、今日は夕日が綺麗じゃんか。世界が赤いなと思ってたら誰かさんも顔も真っ赤で、思わず見とれてたんだよ」

これぐらいの怒り、適当に流すのが手っ取り早い。

彼女は沈黙し、顔を俯ける。

だがすぐに顔をこちらに戻す。本当に顔が真っ赤だ。

今日も相変わらず沸点が低い。逃げる準備はしておこう。

「なんで平気でそーゆー事言えんの？」

「普段から言い慣れてるからじゃないか、知ってるだろ」

「・・・誰にでもそんなこと言ってるなんて外道だね。」

・・・なぜそこまで言われなければならないのか。

それに皮肉なんて、言って大丈夫な相手にしか使わない。

「彼女にだけ言っただけだよ、そーゆーのは！」

どうしてそこで彼女が出てくるんだ。話が飛びまくりである。

煽っておいてなんだが、少し落ち着いてほしい。

そもそも、彼女にだけって・・・そもそも彼女が・・・

そうか、これは嫌味なのか。

自分で考えながら少し切なくなる。

「彼女が居れば是非」

「・・・居ないのは知ってるよ」

「知ってたら俺が驚くな」

「・・・だからって、あたしにそんな事言わないでよ！
変に勘違いしたらどうすんだバカ！」

俺もそこまで鈍感じゃない、と思う。

噛み合わない理由がわかった。

怒ってるではなく、まさか照れてるのか？

照れるなんて珍しいじゃないか。

こんな面白い状況はそうそう無い。

外道なんて言われたんだ。

外道らしく全力でからかうしかないじゃないか。

「何を？」

「何をつて・・・何がよ」

「何を言われたら、どう勘違いすんだ？」

ニヤニヤしないようにするので精一杯だった。

彼女は俯き、うなだれてしまった。

「・・・うう・・・」

ただ、さっきよりも顔が赤く見えるのは気のせいだろうか。

夕日の色だと信じたい。信じたいが・・・

あーやばいか、宜しくないなこれは。

少し調子に乗りすぎたようだ。

罪悪感その他諸々の感情が湧いてしまいそうだ。

「・・・元はといえばあんたが！」

びしつと俺を、箒を持っていない左手で指差す。

いや、そうしようとした、が正解。

頭に血が上って周りが見えてなかったのだろう。

思いつきり手を机のカドにぶつけた。

「いつ・・・たあー」

「おいおい大丈夫かよ。手、痣できてないか？」

まじで痛そうだ。すげえ音したぞ。

俺は吹き出すのを堪え、近づく。

ヤツは手を押さえ、俯いたまま動かない。

そろそろ謝るところ、良い機会だ。

・・・しかし、ヤツはあろう事が捨て身で襲い掛かってきやがった！
この流れは読めなかった。つか謝ろうとしたのに！
空気読めよ！こいつ獣かつ！怖えっ！

「ぐへっ！」

床に叩きつけられ、鈍い音を立てて頭を打った。

痛い。予想外すぎて受け身が取れなかった。

もしや、このまま殺されてしまうのか？バッドエンドか？

なんて痛む頭でまだふざけている俺の脳みそ。いい加減にしろ。

「あんたさあ・・・あんたさあっ！」

ああ、なんか重いと思ったら馬のりされてるのか。
今、重いなんて言ったら本当に殺されそうだ。

ヤツの顔が見える。苦しそうな顔だ。

逆光のせいでよく見えないが、もしかして泣いているのかもしれない。

でもなぜだろう、俺も凄く胸が苦しいんです。

思考と現実が一致しない。

「あたしをおちよくりたいんなら変に優しくしないでよ！
バーカって笑えばいいじゃない！なんでよ？なんで？」

いつもの皮肉が出てこない。

その質問にとっさに答えることは出来なかった。

急にあたりが暗くなり始めてる事に気付く。

ようやく思考が現実に戻ってきたようだ。

冷静なのか焦ってるのかわからない。

「・・・ごめん」

謝りながらもなかなか動かない。

なぜか焦る。焦る。何に？

くだらない皮肉はまだ出てこない。何か言わなければ・・・

世界が壊れてしまうような、気がした。

「好きだから・・・かな」

ずっと口が言葉を紡ぐ。

自分でも内容に驚くが、その言葉に気付かされた気持ち又想う。
胸の苦しみが少し、解れた気がした。

「…え…っあ…冗談…だよね？」

「ああ」

「死んでしまえっ！」

振り上げられた拳をなんとか寸前で押しとどめる。

「冗談だよ」

いつものように笑えてるか？

彼女はバカ、死んでしまえと力無く繰り返していた。

もう拳には殴りかかる気配はなかったが、手は離れない。

彼女と目があう。

薄く微笑んだ気がしたが慌てて目を逸らす。

こいつ、こんな顔してたっけか。一瞬見惚れた自分が悔しい。

朱色のセロファンのせいだろうか。そうに決まってる。

「…意外に可愛いじゃん」

夕日の朱で顔色が隠れてれば良い、そう願った。

二人は並んで帰る。

二人のセカイはこれから。これから。

朱色は沈んでしまった。

朱色のセロファンはもう見えない。

夕日は回る。

次の二人を優しく照らす為に。

朱色のセカイを連れて。どこまでも。どこまでも。

題3話 朱色セロファン（後書き）

少し短いですが、これでBoy's side も終了。
2人のセカイはおしまいです。

終わらせることが出来て良かった・・・

拙い物語でしたが、読んで頂き有難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7735h/>

2人のセカイ

2010年11月24日05時32分発行